

ESPにおける映像を活用した英語表現法(記述)授業

著者	山本 淳子
雑誌名	学長特別研究費研究報告書
巻	14
ページ	49-50
発行年	2003-06
その他のタイトル	Using Media in ESP Writing Class
URL	http://hdl.handle.net/10631/491

新潟県立看護大学学長特別研究費 平成 14 年度 研究報告

ESP における映像を活用した英語表現法(記述)授業

研究者 山本淳子

新潟県立看護大学 (看護基盤科学)

Using Media in ESP Writing Class

Junko Yamamoto Niigata College of Nursing

キーワード：映像(visuals), ESP, メディア(media), 英作文(English composition)

目的

英語教育において映画や映像を利用した場合、オーセンティックな英語、つまり英語学習者用に加工されていない本物の英語が学べるため、学生の動機付けと実用的な英語運用能力養成という二つの面で効果が上がる。Stempleski¹⁾が、“In addition to their valuable content, videos expose students to authentic speech forms in the target language not normally encountered in the more restricted environment of the ESL classroom”と述べるように、通常の授業では得られない効果が映像(ビデオなど)にはある。看護学生にとっても将来役に立つ英語能力を身につけるためには看護に関連するテーマを扱った映像による英語授業の実践をすべきであると考えた。看護・福祉・医療関連をテーマとした映画・映像を収集し、看護学生の授業に生かせる素材を検討・選択し、その素材をもとに英語表現法・記述の授業で利用した経過と、その効果について報告する。

研究の準備

1) 文部科学省大学共同研究機関のメディア教育開発センター(NIME)の「英語メディア教材を活用した英語で教える人文系専門教育の試み」(年3回)に参加してメディア教材を大学英語教育に導入する意義・重要性を学んだ。実際のニュースを使った授業の実践報告がなされた。また、クローズド・キャプション(アメリカで開発された聴覚障害者のための字幕が画面に出るシステム)をコンピュータに取り込む手法・映像を活用したカリキュラムの組み方、コンピュータに画像を取り組む方法などについて講習を受けた。講演では映画やその他の映像が視覚・聴覚に訴えるため学生の興味が持続することが強調された。最終回では受講者の実践記録を発表しあった。映像とコンピュータを結びつけ、学習・評価の効率化を図る手法が中心であった。2) 映像を授業に取り入れた。『クレイマー・クレイマー』(育児・夫婦問題)『Kick the Can』(老人福祉に関連)『パッチアダムス』(医療に関連)を見せ(対象は会話クラス・基礎ゼミナール)その感想を書かせたり、直接聞いたりした。その結果、医療に関係する映画、『パッチアダムス』を見た後の反応が口頭(自由に感想を述べる)・筆記(感想を書いて提出)とも最も活発だった。映画のテーマが専門に関わる内容であれば、流暢な記述 - fluent writing につながると予測できる。実践にあたり ESP(特別の目的のための英語)の観点から看護学生にとって看護に関連した映像を選択することが重要であることを確認した。

研究方法

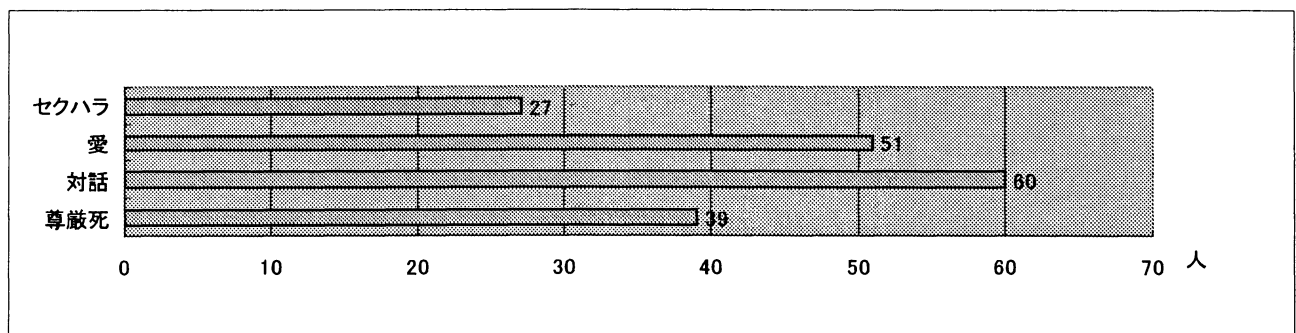
看護学生にとって有意義なインプットを増やすために「尊厳死」を扱った7分程度のCNN放送のディベート番組²⁾を用いた。この映像のテーマに沿った英作文と、教科書で扱ったテーマ、「愛」・「セクシャルハラスメント」³⁾に沿った英作文を Process Approach (形式にこだわらず作文ができあがる過程に焦点を合わせ十分な時間を与えて書かせる教授法)を用いて指導した。対象は英語表現法I・記述を履修する看護大学一期生91人である。尊厳死に関するディベート番組を視聴させたその後ディスカッションを経て、テーマについて賛成・反対の立場をとらせる。その後自由にこのテーマに関する意見を書かせる。他のテーマは映像を使わず教科書の学習内容にそった英作文を書かせた。教授法は同じ Process Approach を用いた。英作文1回目→学生同士による原稿の交換・英語チェック→回収・講師による英語・論理性チェック→返却→学生による推敲→個人的に講師にメ

ールで質問→メールで提出→模範的な作文を紹介・コメント記入（最後の段階を2回）が大まかな流れである。課題ごとに電子メールで提出させ、英語添削の効率化を図った。その後定期試験の自由英作文の4種類のテーマの中から尊厳死を選択した学生の割合を出した。また、英作文の質について3段階で評価した。映像を使って学習した場合の方が学習内容の定着率が高く、その結果過半数の学生が後者をテーマとして選ぶ、専門に近いテーマの英作文の方が質的に高いという二つの仮説を立てた。

結果

試験では自由英作文を2つまで選択して書けることとし、4つのテーマから選ばせた結果、図1のような選択状況となった。一番多かったのが「対話」二番目が「愛」、映像を通して学んだ「尊厳死」のテーマを選択した学生は39人で三番目であった。従って「映像を使わなかった場合と使って学習した場合とでは、後者の方が学習内容の定着率が高く、そのため過半数の学生がそのテーマを定期試験時に選ぶ」という仮説は当てはまらなかった。しかし尊厳死のテーマを選んだ学生の英作文を一つ一つ分析するとその質は全体的に高い。評価は論理性と英語表現力の2点からA,B,Cの3段階で採点した。「尊厳死」を選択した学生の英作文でA評価を受けた学生は26人（この作文を選んだ全体の67%）「対話」13人（同じく22%）「愛」が9人（18%）「セクハラ」が7人（26%）となった。尊厳死を選択した39人中22人が授業中の映像で取り上げられていた具体例を挙げ自分の意見を述べている。そのためそれらは内容が掘り下げられ意見に説得力がある。またA評価の作文（尊厳死について）すべてに、映像に出てきた尊厳死に関わる、高校までの教科書にはない医療関係語彙・表現が使われており2番目の「専門的なテーマの英作の質が高い」という仮説は当てはまったと言える。

図1 自由英作文選択テーマ



考察

今回の試みでは映像が過半数の学生の記憶にとどまるほどのインプットとはなりえなかったが、十分時間をかけて映像を活用することで、学生にとって専門性の高いテーマも現実味を帯び、疑似体験の機会が生まれ英語教育の効果を上げられると予測する。また、結果から考察して、学生の英語記述のレベルの向上のためには看護関連のテーマを引き続き扱うことは意義があると考えられる。

結論

21世紀に世界で通用する英語運用能力を身につけるためには英語番組、英語ニュース、洋画などを最大限に利用し、少しでも本物に触れる時間を増やす姿勢が大切である。会話と同様、創造性と能動的に発信しようとする態度が求められる英語記述において、このことは特に重視されるべき点であると思われる。今後は、研修で学んだコンピュータと映像を組み合わせた手法を用いて、記述能力をはじめ会話力、読解力向上も念頭に置いた、効率的な授業を実践していきたい。

文献

- 1) Stempleski S, Arcario P: Video in second Language Teaching Virginia: TESOL; 1994. p. 26.
- 2) CNN English Express. A Matter of Life and Death. Tokyo: Asahi Shuppan Sha; 2002. p. 107-13.
- 3) Naruse T, Wilkerson B. English For Interaction. Tokyo: Nanundo; 1992. p. 33-7.